

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02645

研究課題名(和文) 日本版複雑性悲嘆療法(J-CGT)の開発とその有効性に関する研究

研究課題名(英文) Effectiveness and feasibility study of the Japanese version of complicated grief treatment (J-CGT)

研究代表者

中島 聡美(Nakajima, Satomi)

武蔵野大学・人間科学部・教授

研究者番号：20285753

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：複雑性悲嘆(complicated grief)に対して、既に有効性が報告されている認知行動療法(Shear et al., 2005)を日本の臨床現場で実施しやすい形に修正した日本版複雑性悲嘆療法(Japanese version of Complicated Grief Treatment, J-CGT)を開発し、その有効性、安全性の検証を目的に、多施設で単群の前後比較試験を行った。目標症例数20例のところ、令和2年度末までに14例が登録し、6例が治療を完遂しており、複雑性悲嘆状、抑うつ症状に改善が認められた。重篤な有害事象は発生していない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の一般死別集団における複雑性悲嘆の有病率が2.4%と報告されており、日本の年間死者数(約130万人)から考えても、潜在的な複雑性悲嘆患者は多いことが推察される。近年、複雑性悲嘆はprolonged grief disorderの呼称で精神障害として位置付けられるようになった(ICD-11, 2019)ことから、精神科医療現場での治療のニーズが高まることが予想される。本研究により我々が開発した日本版複雑性悲嘆療法(J-CGT)の有効性が検証されることで、日本の精神科医療および心理臨床現場における複雑性悲嘆の治療が促進されることが期待される。

研究成果の概要(英文)：We developed a modified version of the cognitive behavioral therapy complicated grief treatment (J-CGT) that was adapted for implementation in Japanese clinical practice. We conducted a multicenter, single-arm, before-and-after study to verify its safety and efficacy. By the end of March 2020, 14 patients had enrolled in the study, and 6 patients had completed the treatment; the latter showed improvement in their prolonged grief and depressive symptoms, and no serious adverse events were noted.

研究分野：精神医学

キーワード：複雑性悲嘆 遷延性悲嘆症 認知行動療法 J-CGT パイロットスタディ

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 複雑性悲嘆治療に関する国内外の研究の動向

死別による悲嘆は、本来自然で正常な反応であり、多くの場合時間の経過とともにその苦痛が軽減していく。しかし、死別経験者の一部では、悲嘆が長期化し、精神的苦痛が著しいことが知られており、このような悲嘆について、1990年代半ばから複雑性悲嘆<sup>5,9)</sup>という概念が提唱されるようになり、2013年に改訂されたDSM-5では持続性複雑死別障害 (persistent complex bereavement disorder)<sup>1)</sup>として、またICD-11(2019)では、prolonged grief disorderとして精神障害に位置づけられた。複雑性悲嘆は、その心理的苦痛が著しいだけでなく、精神・身体的健康やQOLに有害な影響を与えることが報告されていることから、治療が必要な状態であると考えられる。複雑性悲嘆の有病率は10年以内に死別を経験した日本の一般集団においては2.4%<sup>2)</sup>であるが、犯罪被害者遺族(21.9%)<sup>4)</sup>、災害遺族(23.3%)<sup>3)</sup>など突然の暴力的な死別において有病率が高いとされている。複雑性悲嘆の治療については、薬物療法が著効しないことが報告されており、近年のメタアナリシス<sup>12)</sup>では複雑性悲嘆に焦点を当てた認知行動療法が有効であることが報告されている。しかし、複雑性悲嘆の精神療法の研究は主に欧米でなされており、文化的に異なる側面をもつ日本の遺族の悲嘆やまた日本の臨床現場に適した治療技法の開発、検証は不十分な状況にある。

### (2) 研究に至った経緯

研究者らは、Shearら<sup>7,10)</sup>による複雑性悲嘆治療(complicated grief treatment, CGT)が文化背景の異なる日本人においても安全に適応でき、かつ有効であるかを検証するために、オープントライアルでその有効性と安全性の検証を行った(平成22-24年度科学研究費助成事業(基盤研究B)複雑性悲嘆の認知行動療法の効果の検証およびインターネット治療のプログラムの開発:課題番号;22330197)。しかし、CGTは、1回90分-120分と治療時間が長く、日本の保険診療の場では実施しにくいこと、また認知行動療法の基盤が不十分な日本の精神科・心理治療者に対してはやや使いづらいことなどの日本の臨床現場で普及させるには難しい面もあることから、日本の精神科、心理臨床現場に則した改訂が必要であると考えられた。そこで、我々は、より日本の臨床現場に則した形に修正した日本版複雑性悲嘆療法(Japanese version of complicated grief treatment, J-CGT)を開発し、その有効性、実施可能性を評価し、今後のRCTにつなげるための予備研究を実施することとした。

## 2. 研究の目的

本研究では、過去の研究結果をふまえて CGT を改良した J-CGT プログラムを開発し、単群の前後比較試験により、その有効性、安全性についての評価を行うとともに、将来の RCT への準備および、J-CGT の臨床現場での普及のため、治療者の育成およびスーパーバイズ体制を構築することを目的とした。

### 3 . 研究の方法

- 1) 研究デザイン：重要な他者(家族、友人等)との死別を経験した人で複雑性悲嘆を主訴とするものを対象とした JCGT の多施設での対照群をおかない単群での前後較試験
- 2) 対象者：20 歳以上で、複雑性悲嘆の診断基準を満たし ( Inventory of Complicated Grief, ICG 26 点以上 )<sup>6)</sup>、死別から 13 ヶ月以上経過した遺族を対象とする。統合失調症および類縁疾患等、治療に支障のある身体疾患、緊急に治療を要する精神症状の存在等 JCGT を遂行する上で障害となる問題のあるものは除外した。本研究に先立って中島らが行った J-CGT のオープントライアルの結果および Shear らの米国でのオープンスタディ<sup>8)</sup>との比較の観点から 20 例を目標とした。また対象者のリクルートにあたって、研究の Web サイト ( 長引く悲嘆に悩んでいる方へ複雑性悲嘆のための心理療法(J-CGT、ENERGY) ウェブサイト：  
<http://plaza.umin.ac.jp/jcgt/index.html> ) を作成した。
- 3) 実施場所： 国立精神・神経医療研究センター病院、 武蔵野大学認知行動療法研究所、 国際医療福祉大学大学院赤坂心理相談室、 兵庫県こころのケアセンター
- 4) 治療内容：Shear らによって開発された複雑性悲嘆治療 ( CGT ) を日本の治療現場に即して修正した日本版 CGT ( J-CGT ) を開発した。J-CGT は、Strobe ら<sup>11)</sup>の悲嘆の二重過程理論に基づき、喪失に向き合う過程と、回復に焦点を当てた過程を体系的に行うものである。CGT からの修正点としては、日本の治療現場に合わせるために、1 回の治療時間を 90-120 分から約 50 分に短縮し、治療頻度を 1 週に 1 回から 1-2 週に 1 回にした点、またこれまで治療者のスキルにゆだねられていた認知再構成の部分新たにモジュール ( スタックポイントの同定と見直し ) として明確に構造化した点である。
- 5) 評価：一次評価として、複雑性悲嘆の重症度 ( ICG および Complicated Grief Questionnaire ) と全般的改善 ( Clinical Global Impression-Improvement Scale ) を用いた。二次評価項目は、悲嘆関連回避症状 ( GRAQ )、悲嘆の典型的信念 ( TBQ )、抑うつ症状 ( BDI- ) 等である。治療前、治療後、3 ヶ月後、6 ヶ月後にアセスメントを行う。アセスメントは治療とは独立した評価者が実施する。治療後の評価とベースラ

インとの比較をおこなって JCGT の有効性を検討する。また、JCGT の脱落率、有害事象等について調べ、安全性を評価する。

- 6) 倫理的配慮：研究の実施にあたって、各治療施設の倫理審査委員会の承認を得た。また、UMIN-CTR に登録した (UMIN000029930)。

#### 4 . 研究成果

##### 1)対象者の属性

2021年3月末までにウェブサイト等から22件の治療参加の問い合わせがあった。そのうち、14例が適格基準を満たし、研究に登録した。研究登録をした14例のうち、6例が治療を完遂した。治療を完遂した6例はすべて治療後のアセスメントおよび3か月後のアセスメントを終了した。4例は6か月後のアセスメントまで終了している。治療を完遂した6例は、女性3名、男性3例であった。故人との関係は、子ども3例、親1例、きょうだい1例、知人1例であった。死因は自死4例、病死1例、事故死1例であった。

##### 2)精神症状の変化

ICGによる複雑性悲嘆症状は治療前の平均が56.3 (SD 10.9)点であり、治療後の平均は37.5 (10.9)点に低下し、有意な改善が認められた (Wilcoxonの符号順位和検定、 $p=.028$ )。治療から3か月後のICG得点の平均は38.7点 (SD 8.7)であり、治療前と比較して有意な減少がみられ ( $p=.027$ )、3か月後において治療効果が維持されていることが示された。また抑うつ症状についても、治療前のBDI-の平均得点は31.0 (SD 12.1)点であったが、治療後は17.7 (SD 13.5)点、3か月後のフォローアップ時では18.0 (12.4)点であり、いずれも有意な改善 ( $p=.028, .026$ )が見られた。

##### 3)安全性

治療中に頭痛や悲嘆反応の表出などの有害事象は見られたが、自殺行動などの重篤な有害事象は見られなかった。研究登録中14例中4例 (28.6%)がドロップアウトとなったが、すべて新型コロナウイルス感染対策による治療機関における対面治療の中止によるものであり、症状の悪化等によるドロップアウトは見られなかった。

##### 4)まとめ

既に米国で有効性が実証されている複雑性悲嘆治療 (CGT) を日本の心理臨床、精神科医療現場においてより使いやすくした日本版 CGT (J-CGT) を開発し、その有効性、安全性の評価を対照群を置かない前後比較試験で検討した。現在まだ目標症例数の70%であり、十分効果検証ができていない段階ではあるが、複雑性悲嘆症状、抑うつ症状に有意な

軽減がみられ、重篤な有害事象も発生していないことから、CGT と同様に有効性が見られる可能性が高い。今後は研究対象者を増やし、十分な有効性についての検証を行う予定である。

< 引用文献 >

- 1) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. Fifth edition. Washington, DC: American Psychiatric Publication, 2013
- 2) Fujisawa, D., Miyashita, M., Nakajima, S., et al.: Prevalence and determinants of complicated grief in general population. *Journal of affective disorders* 127:352-8, 2010
- 3) Kristensen, P., Weisaeth, L., Heir, T.: Psychiatric disorders among disaster bereaved: an interview study of individuals directly or not directly exposed to the 2004 tsunami. *Depress Anxiety* 26:1127-33, 2009
- 4) 中島聡美, 白井明美, 真木佐知子他: ト라우マの心理的影響に関する実態調査から 犯罪被害者遺族の精神健康とその回復に関連する因子の検討. *精神神経学雑誌* 111:423-9, 2009
- 5) Prigerson, H.G., Frank, E., Kasl, S.V., et al.: Complicated grief and bereavement-related depression as distinct disorders: preliminary empirical validation in elderly bereaved spouses. *The American journal of psychiatry* 152:22-30, 1995
- 6) Prigerson, H.G., Maciejewski, P.K., Reynolds, C.F., 3rd, et al.: Inventory of Complicated Grief: a scale to measure maladaptive symptoms of loss. *Psychiatry Res* 59:65-79, 1995
- 7) Shear, K., Frank, E., Houck, P.R., et al.: Treatment of complicated grief: a randomized controlled trial. *Jama* 293:2601-8, 2005
- 8) Shear, M.K., Frank, E., Foa, E., et al.: Traumatic grief treatment: a pilot study. *The American journal of psychiatry* 158:1506-8, 2001
- 9) Shear, M.K., Simon, N., Wall, M., et al.: Complicated grief and related bereavement issues for DSM-5. *Depress Anxiety* 28:103-17, 2011
- 10) Shear, M.K., Wang, Y., Skritskaya, N., et al.: Treatment of complicated grief in elderly persons: a randomized clinical trial. *JAMA Psychiatry* 71:1287-95, 2014
- 11) Stroebe, M., Schut, H.: The dual process model of coping with bereavement: Rationale and description. *Death Studies* 23:197-224, 1999
- 12) Wittouck, C., Van Autreve, S., De Jaegere, E., et al.: The prevention and treatment of complicated grief: a meta-analysis. *Clin Psychol Rev* 31:69-78, 2011
- 13) World Health Organization: ICD-11 for Mortality and Morbidity Statistics (Version : 04 / 2019)<https://icd.who.int/browse11/l-m/en#/http%3a%2f%2fid.who.int%2fcd%2fentity%2f1183832314>. Geneva: WHO, 2019

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nakajima Satomi	4. 巻 373
2. 論文標題 Complicated grief: recent developments in diagnostic criteria and treatment	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences	6. 最初と最後の頁 20170273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1098/rstb.2017.0273	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡崎 純弥, 中島 聡美	4. 巻 16
2. 論文標題 複雑性悲嘆治療の実際	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 トラウマティック・ストレス	6. 最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ghesquiere Angela, Bagaajav Ariunsanaa, Ito Masaya, Sakaguchi Yukihiro, Miyashita Mitsunori	4. 巻 19
2. 論文標題 Investigating associations between pain and complicated grief symptoms in bereaved Japanese older adults	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Aging & Mental Health	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13607863.2019.1594166	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 M. キャサリン・シア, 監訳 中島聡美	4. 巻 15
2. 論文標題 トラウマによる複雑性悲嘆の治療	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 トラウマティック・ストレス	6. 最初と最後の頁 73-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島 聡美, 伊藤 正哉, 白井 明美, 小西 聖子	4. 巻 13
2. 論文標題 海外のSupervisorからSuperviseを受けたケースについて考える 複雑性悲嘆治療(CGT)のコンサルテーション 海外で開発された治療技法の日本への導入の課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 認知療法研究	6. 最初と最後の頁 25-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 正哉, 竹林 由武, 中島 聡美	4. 巻 35
2. 論文標題 トラウマ治療における悲嘆 複雑性悲嘆治療からの逆照射	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 583-587
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 中島 聡美, 伊藤 正哉, 白井 明美, 小西 聖子
2. 発表標題 海外のSupervisorからSuperviseを受けたケースについて考える 複雑性悲嘆治療(CGT)のコンサルテーション 海外で開発された治療技法の日本への導入の課題
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中島聡美
2. 発表標題 複雑性悲嘆の診断および治療の近年の動向
3. 学会等名 第1回グリーフ&ピリブメント学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白井明美
2. 発表標題 複雑性悲嘆の心理療法
3. 学会等名 日本グリーフ&ビリーブメント学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中島聡美, 伊藤正哉, 白井明美, 小西聖子, 新明一星, 松田陽子, 片柳章子, 淺野敬子, 成澤知美, 正木智子, 石丸徑一郎, 竹林由武, 金吉晴
2. 発表標題 日本における複雑性悲嘆の認知行動療法 (CGT) の有効性についての予備的研究.
3. 学会等名 第113回日本精神神経学会学術総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹林由武, 伊藤正哉, 中島聡美
2. 発表標題 複雑性悲嘆の診断基準: 近年の動向と疾病構造
3. 学会等名 日本トラウマティック・ストレス学会第16回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nakajima S, Ito M, Shirai A, Konishi T, Kim Y
2. 発表標題 A Multicenter Open-label Trial to Evaluate the Effectiveness and Feasibility of Complicated Grief Treatment (CGT) for Japanese Patients with Complicated Grief
3. 学会等名 International Society of Traumatic Stress Studies 35th Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年



## 〔図書〕 計1件

1. 著者名 ウルリッヒ・シュニーダー、マリリン・クロワトル、前田 正治、大江 美佐里	4. 発行年 2017年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 406
3. 書名 トラウマ関連疾患心理療法ガイドブック	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>研究用Web site          長引く悲嘆に悩んでいる方へ複雑性悲嘆のための心理療法 (J-CGT、ENERGY) ウェブサイト  <a href="http://plaza.umin.ac.jp/~jcggt/index.html">http://plaza.umin.ac.jp/~jcggt/index.html</a></p>
---

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	白井 明美  (Shirai Akemi)  (00425696)	国際医療福祉大学・赤坂心理・医療福祉マネジメント学部・教授   (32206)	
研究分担者	竹林 由武  (Takebayashi Yoshitake)  (00747537)	福島県立医科大学・医学部・助教   (21601)	
研究分担者	伊藤 正哉  (Ito Masaya)  (20510382)	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・部長   (82611)	

## 6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 英三郎  (Tanaka Eizabro)  (20743040)	公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構・こころのケアセンター・客員研究員    (84504)	
研究分担者	小西 聖子  (Konishi Takako)  (30251557)	武蔵野大学・人間科学部・教授    (32680)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松田 陽子  (Matsuda Yoko)    (32680)	武蔵野大学・認知行動療法研究所・客員研究員    (32680)	
研究協力者	大岡 友子  (Oooka Tomoko)    (32680)	武蔵野大学・人間社会研究科・大学院生    (32680)	
研究協力者	今野 理恵子  (Konno Rieko)  (90884586)	武蔵野大学・人間科学部・助教    (32680)	
研究協力者	井上 美里  (Inoue Misato)    (32680)	武蔵野大学・認知行動療法研究所・客員研究員    (32680)	
研究協力者	片柳 章子  (Katayanagi Akiko)  (80792407)	国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・客員研究員    (82611)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	浅野 敬子  (Asano Keiko)  (40823414)	武蔵野大学・人間科学部・助教    (32680)	
研究協力者	大山 みち子  (Ooyama Michiko)	武蔵野大学・人間科学部・教授    (32680)	
研究協力者	牧野 みゆき  (Makino Miyuki)  (70838078)	武蔵野大学・認知行動療法研究所・客員研究員    (32680)	
研究協力者	山本 このみ  (Yamamoto Konomi)	武蔵野大学・人間社会研究科・大学院生    (32680)	
研究協力者	正木 智子  (Masaki Tomoko)	武蔵野大学・人間社会研究科・大学院生    (32680)	
研究協力者	堀越 勝  (Horikoshi Masaru)  (60344850)	国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・特命部長    (82611)	
研究協力者	亀口 憲治  (Kameguchi Kenji)  (10091240)	国際医療福祉大学・医療福祉学研究科・教授    (32206)	
研究協力者	小畠 秀吾  (Obata Shugo)  (50323308)	国際医療福祉大学・医療福祉学研究科・准教授    (32206)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	加藤 寛  (Kato Hiroshi)  (80463321)	公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構・こころのケアセンター・センター長    (84504)	
研究協力者	福井 貴子  (Fukui Takako)	公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構・こころのケアセンター・研究員    (84504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関